「四重興廃」判の一考察

芹沢泰謙

(一) 問題の所在

「四重興廃」判は『法華玄義』巻二上に[1]その発想の原型がみられるのであるが、そこでは爾前・迹門・本門・観心の四重の相互の関連性の中に、法華経の優越性と法華経をもってしての止観観心という修行のあり方を論じている。

しかし、日本天台の中のいわゆる中古天台本覚思想においてはこの四重興廃によって「止観勝法華劣」という表現で法華経をも否定し、[2]天真独朗止観明静の観心の概念を絶対最高のものとするのである。四重興廃はこの止観観心の絶対性超越性を導出する教判理論の根拠となり、その理論構成によって示された観心の絶対性は観心を最高概念とする本覚思想の絶対的一元論と理解されるのである。四重興廃を中古天台思想の定型的な表現で示すと、

「迹の大教興れば爾前の大教廃し、本の大教興れば迹の大教廃し、観心の大教興れば本門の大教廃す。[3]」

ということになる。観心の大教は己心中所行の法門をいい、それは本迹未分天真独朗の摩訶止観の観心とする。

観心は四重興廃によって絶対最高の概念となり、四重興廃は「観心」の絶対性超越性を表わす教判理論となるのである。

この観心の絶対性超越性を導出する教判理論の構成によって、「観心」の概念の絶対性は中古天台本覚思想の絶対的一元論として規定されるのである。爾前・迹門・本門・観心という四重興廃の順序は、例えば本門が迹門に対する本門という相対的な意味での本門であるとき、それは更に観心と対比され、その観心によって観心の位置へと止揚されて、本迹不二の観心という絶対的立場を示すのである。迹門は本門によって否定され、本門は観心によって否定されて、観心が最高概念として導出される。ここで爾前と迹門の相対・迹門と本門の相対・本門と観心の相対はそれぞれ二者択一の論理としての取捨勝劣が適用され、窮極として観心が導き出される。そしてこの観心が最高概念とされるのである。このように、四重興廃における観心は爾前・迹門・本門という形で順次対比させてきた相対的概念を絶対的一元論へと止揚統一しようとする思想的意味を持つのである。換言すれば、前三重の爾前・迹門・本門が互いに教相として示される概念であるのに対して、観心は教相に対する観心としての相対的意味での概念の観心ではなくて、その教相をも否定止揚した絶対的な意味での観心として、中古天台の観心至上主義が主張され、現実のあるがまま現実そのものが絶対肯定されて、「止観勝法華劣」の中古天台本覚思想の特徴が示されるのである。

そこで、四重興廃の順序に関して考察してみるに、爾前・迹門・本門・観心と順次相対されてなされる興廃は取捨勝劣という二者択一の論理である。爾前よりは迹門・迹門よりは本門・本門よりは観心と次第するのである。二者択一の論理には、単に一方を取って他方を捨てるという単なる取捨としての二者択一と、二者のどちらかが他方を包摂する、いわゆる止揚統一の形での二者択一とがある。前者は抽象的な統一を求め、後者は総合的な統一を求める論理方法であるといえる。二つの相対する概念を比較対照して、両者をどう統一するかという考え方において、前者は取捨による二者択一、後者は一方が他方を否定的であれ肯定的であれ包摂止揚する二者択一としての方法であるといえるのである。「四重興廃」を考える上で、この二通りの二者択一の論理のどちらかが適用されて理解されているのでは

ないか、又は二者択一の論理は適用されてはいないかを判断することは、無意味なことではないと考えるものである。「止観勝法華劣」の考え方は教相を否定して観心を取るという意味であると理解して、そのまま四重興廃の順序次第に当てはめるならば、取捨による二者択一によって得られた考え方であるといえる。事実、日蓮教学においても『開目抄』に示される五重相対をこのような考え方で理解している立場がみられるのである。(4)

しかし、中古天台思想の「観心」は絶対的一元論として、教相を否定的媒介として止揚統一しているといえるので、それを単なる取捨の二者択一として四重興廃の本門と観心、又は教相と観心と相対させて得られる考え方とするのは短絡すぎると思える。観心の絶対性を現実の絶対肯定と表現する時、理論としての教相は否定的媒介として観心に止揚統一されるからであり、観心主教相従の統一がそこにみられるからである。それ故、四重興廃を考えるとき、包摂止揚の二者択一の論理を考えながら判断することは充分に意味のあることであるといえる。

このような二者択一の論理を基準として、中古天台思想の教判となった四重興廃の考え方を媒介とし、日蓮聖人門下の学僧の中で双璧とされる行学院日朝師（一四二二―一五〇〇）と慶林房日隆師（一三八五―一四六四）の両者が四重興廃、更には本迹と観心、教相と観心をどのように把えていたかを比較対照してみたい。

(二) 行学院日朝の「四重興廃」観

行学院日朝師（以下朝師とする）の日蓮教学史における位置は、身延門流における本迹一致の立場に立つ学僧で、その教学は権実判を主体として著わされている。事実、朝師の著述中において、管見の限りではあるが、本迹や教観等の問題に関して論じている箇所は少ないといえる。「四重興廃」に関しても、この用語を記している箇所は数箇所にすぎず、日隆聖人のように「四重興廃」の項目をたててまで論及している箇所は見当らないのである。

朝師の本迹一致の思想は本迹未分思想を加味した題目超絶論の立場からの一致論であるということは、望月歓厚・執行海秀両博士も指摘されているところである。(5)『観心本尊抄私記』において

「所詮一経ヲ習フニ、三重ノ約束有レ之。一ニ本迹ハ勝劣ニシテ然モ一体也。其ノ故ハ既ニ本迹ト云フ名言ノ前ニ浅深聞タリ。サレドモ成仏ハ同ナリ云云。二ニハ五字ハ正行本迹ハ助行云云。所詮成仏ノ種脱ハ五字ナリ。尤モ以レ之可レ為二正行一。本迹ハ此ノ五字ノ内ノ功徳法門ヲ開玄スル故用レ之為二助行一ナリ。三ニハ二十八品文文句句五字也ト得レ心読ナリ。―（中略）―。法華一一ノ文字観心本尊ニテ可二御座一ト云フ習ハ第三重ノ義ナリ。(6)」

と述べ、同様な事を『本迹二門事』には

「当流伝云、就二本迹一三重習有レ之。一ニハ本迹ト云名言ノ別ハ勝劣也。成仏ノ辺ハ同也。二ニ正行ノ重ハ首題也。本迹異無レ之。本迹二門ハ助行ノ処ニ論レ之。仍テ正行者成仏ノ正行也。彼ノ正行ノ五字ノ内ニ有レ之処ノ功徳法門ヲ本迹ニ分別シテ説レ之ヲ也。用レ之助行分也。三ニハ二十八品文々句々但妙法蓮華経ト得レ心也。―（中略）―。要ノ題目ハ本迹一体ノ果分也。仍テ題目本迹開眼ノ秘法ナレバ本化門流ノ御経ニ向フニハ一一文文妙法蓮華経ナリ。―（中略）。権実本迹未分ノ内証ヲ妙法蓮華経トハ号スナリ。（乃至）実相ノ極理ハ本迹一体也。(7)」

と示している。本仏所証の本法は首題の五字であっていまだ本迹に分つべきものではなく、ただ助行の用としての本迹二門があるというのである。本迹は妙法五字の功徳法門を開立する助行の面からの分別であって、本来は未分一体であるとする。本迹は題目を説く次第を分別する意味であって、内証としては本迹未分本迹一体であり、それが妙法蓮華経の五字であるとする。

この引用によっても明らかなように、朝師の立場は本迹未分の思想をもって、題目を絶対とする題目超絶論といえる一致論である。このような朝師の題目を絶対とする本迹未分の一致論の考え方は、顕本論においても、中古天台思

想と同様の無作本覚の理成顕本を正意とするのである。『法華草案抄』に

「聞レ之（五百塵点）サテハ如来成仏ノ初ハナカリケリ。所詮無始無終ノ仏ニテ御座スナリ。爾ハ仏計リ不レ可ニ無始無終一我等モ無始無終ナリ。我等計不レ可ニ無始無終一十界皆本来常住ニシテ無始無終ナリト達スル処テ無作三身モ自ラ顕ルルナリ。是ヲ理成トハ云ナリ。故ニ事成ノ本ハ取寄ナリ。落居ハ十界常住ノ顕本ナリ。」(8)

と示しているように、顕本の正意は我等及び十界すべてが本来常住して無始無終であることを明かすことにあるとして、五百塵点久遠実成の事成顕本に対しての無作理成顕本を正意とするのである。教相としての五百塵点の事成顕本は「取り寄り」にすぎないとするのである。十界常住の理成顕本を云う事は、事成顕本を説示する教相の五百塵点を迹仏の寿命と見做して、十界依正の森羅万象の顕本・即ち理成の顕本を正意と主張することである。朝師における本迹未分思想をもってしての本迹一致論と、中古天台思想と同義の無作理成顕本正意の考え方は、中古天台の教判である四重興廃を朝師がどのように理解していたかを考察するときの重要な前提条件である。そして、この前提は朝師を中古天台思想との比較対照の中で、四重興廃をはじめとして個別的な問題についても、それがどう関連しあっているかを明らかにする基本的立場を示すものである。この前提条件をもって、朝師は当時の中古天台思想の影響下にあって、それにどのように対処し、それをどのように受容したかを「四重興廃」について検按することにする。一般に、朝師は修学の過程から中古天台教学を習学し、一致派教学の組織大系化につとめたことは周知のことであり、中古天台思想はほぼ無条件にこれを受容し依用したといわれている。(9)

そこで、朝師の「四重興廃」に対する考え方を考察するに、先にも触れたように、朝師は四重興廃や、この考え方に対する本迹・教観のことにあまり詳しく論述はしていないのである。「四重興廃」の用語も『観心本尊抄私記』に数箇所述べられているにすぎない。いま、それを列挙してみると、

(一)「本門与観心云云。就二此事一天台家ニ申ス事アリ。玄義文句ハ尓前迹門本門観心云云四段配立ナリ。是レ教相分別ノ部ナル故ナリ。止観ハ尓前迹門本門三段ノ配立ナリ。本門ノ外ニ観心不レ言レ之。観心トハ本門ノ中ノ深義ナルが故ナリ。(10)」

(二)「問。釈尊一代ノ機根ノ教説ノ有様如何。口決云ク。四重ノ浅深有ルナリ。先ズ尓前ノ意ハ念ヲ持テアツカフ赴機ノ説ナリ。次ニ迹門ノ意ハ念ヲ面ニ立テ開ニ三乗五乗七方便九法界ノ局情一会ニ唯一仏乗一ナリ。断迷開悟ト機ニ下ル形ナリ。第三ニ本門ノ意ハ三千ノ諸法・事事ノ当体無作三身ナリ。会ニ迹仏一帰ニ本仏一会ニ始覚一顕ニ本覚一此ノ分ハ猶是機ノ辺ニ下ル質ナリ。第四ニ観心ノ意ハ不レ分ニ本迹一一法不生ノ重ナリ。能所亡却シ機法泯絶スルナリ。(11)」

(三)「止観ハ玄義・文句ニ所レ言ノ観心ノ重歟事。或云ク。此ノ止観ハ天台智者説己心中所行法門ト云ヘルハ仏意内証ノ仏知見ノ覚体ナリ。是即久遠実成ノ自受用ノ内証ナリ。理非造作故曰天真等云云是ナリ。本迹不二ノ上ニ所レ立ノ行相ナリ。玄文ノ四重ノ興廃ノ中ノ観心ノ大教ナリ。(12)」

(四)「或云。本門迹門ハ能通ナリ。本迹倶絶ノ重ハ所通ナリ。山王院ノ云ク。以二久近一判ニ本迹一尼乾外道ノ所摂ナリ云云。私云。能通者顕本分歟。或云。籤ニ云ク。若悟心性本迹倶絶。故ニ云ニ本迹雖殊不思議一一一ニ彼殊一故故知徒引ニ遠近一未レ了ニ観心一云云。本迹雖殊等ノ釈ハ観心ノ意ト云事ハ此釈ニテ習フナリ。―(中略)―。教相ノ故ニハ有ニ本迹ノ不同一。観心ノ故ニハ本迹不二ナリ。故ニ本迹雖殊不思議一ト云云。(13)」

(五)「或抄云。問。観心本尊抄ニ天台伝教等ハ以ニ迹門一為レ面以ニ本門一為レ裏百界千如等云云。此事不審ナリ。南岳天台ノ立行モ専ラ以ニ本門一為レ面見タリ。仍テ四重ノ興廃ノ時、本迹ノ上ニ観心ヲ立テタリ。是レ併ラ本門終窮本迹不二ノ重位ナリト云フ事釈義尤モ分明ナリ。如何トシテ迹面本裏ノ義ヲ成シ給フ耶。示シテ云ク。此ノ事ハ此ノ御抄ノ所詮ナリ。尤モ可レ致レ意歟。然ニ以ニ五字一付ニ本化一迹化他方ヲバ簡レ之了。然則天台宗以ニ迹門ノ理ノ一

念三千ニ本迹不二ノ法体、己心所行ノ法門ト成スルナリ。事ノ一念三千ト者、妙法五字末法相応ノ修行ナルベシ。此ノ御抄ハ題目ヨリ以テ五字ニ為ヲ観心ニ始終顕シ此義ヲ玉フト習フナリ。サレバ先師大聖人ノ所作ノ次第ハ方便寿量品ノ後、題目ヲ唱ヘ給フ事、迹本観心の次第ト相伝スル是ナリ。(14)」

等と挙げることができる。これらに共通していえることは、朝師は四重興廃について中古天台思想の表現をそのまま述べているといえる。本迹一致の立場から観心を本迹不二・本迹未分としている。爾前・迹門・本門は教相の分別であり、止観観心はその教相を分別しない本迹一致の観心としている。また、観心は妙法五字をもって観心とし、事の一念三千であるとしている。妙法五字・題目を唱えることを観心とするのである。この題目を唱えることを観心とすることは、中古天台思想との相違なのであるが、それは末法相応の修行ということであり、法体としての分別は述べてはいない。あくまでも本迹一致の上の理解ということである。爾前と迹門との興廃は法華経と他の諸経との教判で、法華経の優越性をもって他の諸経を廃するのである。そしてこのことは天台教学の基本である五時八教の主題であって、四重興廃の教判においては既知のこととして重視するところではない。問題は迹門と本門・本門と観心、更には教相と観心との興廃ということである。朝師の基本的立場は叙上のように、この問題は本迹未分・本迹一体という本迹一致論でもって理解しているといえる。本迹一致・一体不二を観心とし、観心は妙法五字・題目であるとするからである。そして、朝師は教相としての本迹と妙法五字の観心とのいわゆる教観相対については、中古天台思想のような止観勝法華劣といった表現で教観を対比してはいないのである。観心は妙法五字の題目であって、その題目を唱えることが観心であるとする点が中古天台思想の観心の意味との全くの相違点である。それは、教相は法華経であり観心は題目であって、更に観心の題目は本迹不二の上に立つ行相であるから教観は対比すべきものではないとしている。更に、観心の題目を唱えることが正行であり、本迹の教相は助行であるから正行助行を一致させる、即ち本迹

一体教観一致の立場を示すのである。

このように、朝師の四重興廃に対する本迹一致論の立場からの理解は、迹門・本門・観心と順次次第する取捨の二者択一の論理は適用されてはいないといえる。爾前と後三重の対比も四重興廃によるというよりは、天台教学の基本としての権実判によるものといえる。それ故、朝師には中古天台思想にみられる四重興廃を教判とする段階的取捨としての二者択一の論理は見うけられないといえる。中古天台思想の受容はしても、それは本迹未分的な観心の題目の超絶論であって、四重興廃そのものより導出される観心を最高概念とし、それを妙法五字に置き換えるということではないといえる。朝師の妙法五字はあくまで本迹一致、それも迹門の実相の理の一念三千と本門の事の一念三千とが、天台の己心中所行の法門と妙法五字という時機相応の修行の差異であって、実相極理の法体は一体であるとするのである。これは中古天台思想の理成顕本の考え方を日蓮教学にそのまま充当したものといえるが、四重興廃そのものを用いての表現、四重興廃より導き出された観心思想ではないといえる。教観ともに修行の相の表現であり、教観一致の修行を示すのである。そのことは、例えば『御本尊十界口伝』『当家朝口伝』にそれぞれ

「法華の行者一辺ノ首題ニ十界成仏之方便品ヲ読誦スルハ迹門不変真如ノ理、寿量品ヲ読誦スルハ本門随縁真如ノ理題目ヲ奉レ唱ヘ本迹不二ノ観心ナリ。仍テ本迹観心ト修行シ居タル行者ナリ。(15)」

「尋云ク。御在世ハ方便・寿量・題目ト次第云云。如何習レ之耶。口決ニ云ク。方便・寿量ノ両品ハ教、題目ハ観ナリ。仍テ教観ト口伝スルナリ。可レ秘ス。―(中略)―。方便品ハ迹門ノ肝心ナリ。寿量品ハ本門ノ肝心ナリト云テ本迹不同ヲ弁ズル重ナル故ニ教ト云フナリ。題目ハ本迹不二ノ果上ナル故ニ観ト云フナリ。―(中略)―。今家ニ首題ヲ観心ト云ヘルハ迹本ノ上ノ要ノ重ナリ。(16)」

と示されているように、修行においても方便品寿量品の読誦と題目を唱えることとは教観一致・本迹一致の具体的実

践といえる。

このように、行学院日朝師においては「四重興廃」は、師の教学大系の中では重要視されてはいないのである。それは朝師の本迹一致論者としての立場から、形式的にでも段階的な取捨勝劣という二者択一の論理を示す四重興廃の考え方に同調できなかったであろうし、観心を題目を唱えることとする日蓮教学の基本的立場からは教相である法華経と観心の題目との対比区別を殊更に強調する意味もないということになると思える。その意味では朝師の教学の中古天台思想のいう観心と日蓮教学の立場の観心とを明白に区別していたといえる。そして、その区別は修行の面からの相違ということで強調されており、中古天台思想の観心のいう現実の絶対肯定、つまり修行の否定という考え方は受用できるものではないと理解できる。それ故、そのような考え方の観心を導出する四重興廃については、朝師は重視してはいないのである。

(三) 慶林房日隆の「四重興廃」観

慶林房日隆聖人（以下隆師とする）は、先述した行学院日朝師と並び称される日蓮聖人門下の学僧の一人である。隆師の教学は朝師が権実判を教学大系の主題として、広く一般仏教各派と日蓮教学との比較検討したのに対して、本迹勝劣という本迹判をもって天台教学と日蓮教学との比較対照をしたのである。

日蓮教学において、本門迹門を論じるときその基本的立場は法華経をどうみるかという法華経観によるといえる。天台の法華経観は迹門の法華経であり、当家（日蓮聖人）のそれは本門の法華経であると対比するのである。この迹門・本門は法華経一部の前十四品を迹門、後十四品を本門として両者を対照させる本迹二門の並列的対比から、更に法華経全体を迹門の中心である方便品を通してみる立場と、本門の中心である寿量品を通してみる立場とに対比さ

れ、前者を迹門の法華経、後者を本門の法華経とする。迹門と本門のそれぞれの法華経は、在世正宗と滅後流通の三時三段の時間的対比を通して、理と事という形で比較され、それぞれの理論的根拠を理の一念三千・事の一念三千と表現するのである。理の一念三千は迹門方便品の諸法実相によって示される真理であり、事の一念三千は本門寿量品の久遠実成という本地開顕によって、迹門の理の一念三千（実相）があらためて真の意味をもって開顕される真理をいうのである。このような対比の迹門法華経・本門法華経という法華経観が天台教学と日蓮教学の相違を区別する前提であるとし、両者（天台と当家）の比較対照を通して本門の法華経の優越性を示すことが、日蓮教学の天台教学を研鑽する意義であるといえる。隆師はこの立場から教学研鑽の努力をしたのであり、その教学は全著述を通じて台当の比較検討といっても過言ではなく、しかも天台教学の対象は隆師当時の天台学、いわゆる中古天台思想との比較対照であって、中古天台思想と日蓮教学との対比といえるのである。それ故、隆師は中古天台思想の個々に至るまで問題を分類整理し、当家との比較相違を試みている。「四重興廃」に関しても『私新抄』には、特に項目をたてて論じているのである。先述したが四重興廃は爾前・迹門・本門・観心と順時相対していくのであり、中古天台思想では「観心至上主義」としての「観心」の導出教判として用いられている。ところが、隆師は観心至上主義を観心偏重と批判し、本門の法華経を超勝とする教相主義の立場よりこれを批判否定するのである。中古天台思想の止観勝法華劣の観心正意は法華経至上の立場から大謗法大僻見と論難破折するのである。そこで問題となるのは、中古天台思想の「観心」と、隆師の本門の法華経の「本門」との相違である。四重興廃においても、本門と観心は対比されており、中古天台思想はこれより観心正意の止観勝法華劣を結論とするのであるが、隆師はそれをどう考えているかが問題である。また、中古天台思想においては本門と観心は教相と観心ということでもあるが、教相の中における迹門と本門との対比にも問題がある。それは単なる本迹相対、迹門十四品と本門のそれとの並列的対比ではなく、迹門の法華経

と本門の法華経ということによせて、即ち迹門と本門という用語によせて思想として相対する対立概念のすべてを総称する代名詞として用いられていると思えるからである。観心で絶対的一元論として止揚統一される前段階（教相としての段階）の相対的論理として、対立概念の集約を「迹門・本門」という形で整理していると考えられるのである。しかも、そこで対比された迹門と本門との相対概念は単なる二元論的な同一次元の対立概念ではなくて、迹門に示した概念を相対概念として、本門はその相対概念に対する概念として一応整理し、更にその相対概念を総合（止揚統一）する形での概念としての絶対概念を表示するのである。そこでは二者択一の論理として、総合的な統一が適用されているといえる。教相においては本門における概念は絶対的な概念となる。しかし、四重興廃に依る以上、本門のこの絶対概念も論理形式の上においては、相対概念に対する絶対概念として、やはり相対という形式を越え得ないのである。そこに観心の超越性を求める必然性があるといえる。中古天台思想において、定型的に迹門と本門とを類別する相対概念としての用語は、『法華略義見聞』（伝忠尋）に代表的に見られる。[17] この相対概念の用語は日蓮教学でも非常に多く用いられるのであるが、四重興廃に依って用いられるのかそうでないのかの違いによって、その用語の定義づけが異なってくるのである。隆師の努力した台当の区別は、ある意味ではこの違いになる定義づけの努力であるといえる。「迹門と本門」に関する種々の考え方は日蓮教学においても重要な問題の一つである。例えば、先にもふれたように、日蓮聖人の『開目抄』における五重相対判は四重興廃と類似しており、特に本迹相対においては種々の議論がある。本迹判が多義であるため、更に第五重の相対は問題の多いところとなっている。

このような、「迹門と本門」をどう考えるか、四重興廃をどうみるかについての面から隆師の考え方を論及していくことにする。

先ず、「四重興廃」についてであるが『私新抄』に「四重興廃事」という項目をたてて、その中で

「口伝云。玄義ノ第二ニ四重興廃ヲ判ゼリ。当世ノ天台宗此文ノクイゼ(株)ヲ守リ、法華経ヨリ止観勝レタリト云大謗法大僻見ヲ云出タルナリ。―(中略)―。本末ノ釈ノ前後ヲ見ルニ教観ノ不同ヲ判ゼリ。爾前・迹門・本門ト次第ヲ定メ、言語ヲ以テ他ノ事ヲ沙汰スル分ニハ何ナル本門終窮ノ極理トモ云ヘ教門ナレバ爾前迹門本門ノ大教ヲ絶シテ己心ノ権実本迹ヲ観ジテ一念一心ノ処ニ万法ヲ収ム。心外ノ言語教門ヲ絶シテ唯一実性無空仮中タル心性不思議ノ一絶ヲ修行センガ為ニ本迹ノ大教ヲ廃ストハ釈シ玉フナリ。而ニ本門実相ノ外ニ観心ノ至理ト云事有レ之ノ観心ノ理勝レタリトハ不レ可レ得レ意。一代諸経ノ至極ハ本門ナリ。本門ノ外ニ何ナル深理カ可レ有レ之耶。観心ト云フハ本迹ノ依経ノ義味ヲ聞テ、次ニ己心ノ経ヲ尋顕スヲ観心ト云ナリ。―(中略)―。天台妙楽出世ノ時分ハ智者高貴ノ者多キ時節ナレバ観心修行ニ堪タリ。彼ノ機ヲ勧ンガ為メ、迹ノ大教起レ爾前ノ教亡シ、本ノ大教起レ迹門亡シ、観心大教起レ本ノ大教亡スト釈シ玉フ。当世天台宗ノ謬解出来シテ法華ノ本迹ハ顕説法華ノ分、止観観心ノ重ハ根本法華等ト云テ、止観勝法華劣ト云ヒ、止観ハ不レ依ニ法華一ト云フハ謬ノ中ノ謬リ、謗法ノ中ノ大謗法ナリ。可レ憐可レ憐。」(18)

と述べて、中古天台思想の四重興廃の考え方を批判している。『法華玄義』の示す四重興廃は『玄義』及び『釈籤』の示すとおりの理解をするのが正意であり、中古天台思想のいうように「止観勝法華劣」や「不レ依ニ法華一」等とするのは謬解僻見であるとする。隆師においては、一代諸経の至極は本門であり、本門を廃しての観心は無意味であり依るべきではないと排するのである。同様なことは『法華宗本門弘経抄』にも

「流義に云く。玄の二の四重の興廃とは待絶二妙を釈する下に絶待妙を釈するとき、文を七に分つと云へども、其の詮は四教五味に経て絶を顕し以て開権顕実妙の相を示す時、四重の興廃を釈せんとして、迹の大教興しぬれば方便の教を廃し、又本の大教興しぬれば迹の大教を廃し、観心の大教興しぬれば本の大教を廃す等と釈して「今入レ観

縁レ寂言語道断本教即絶絶由二於観一将二此絶名一名二於観妙一為レ顕二此義一故以レ絶為レ妙」等と釈し玉ふ。籤の二に云く。「若し本遠の教興る故に迹として絶せしむ、本迹絶すと雖も豈に遠を説くに即して能く心性を知らんや、若し心性を語らば迹本倶に絶す故に本迹雖殊不思議一なりと云ふ。彼の殊を一にする故なり。故に知ぬ。徒らに遠近を引けども未だ観心を了せず。遠近は彼に自す。我に於て何かせん。貧の寶を数るが如しとは此の謂なり。」云云。此の本末の釈は三大部教観の約束に背く処これなし。仍て本妙と観妙と内外の不同計りにして法体はこれ同じ。本妙は位等妙二覚に有り。他に有る故に外なり。それを所観の境と為して己心に入れて内を成ずるなり。能観の観妙は位観行即に有り。故に本妙を以て他の宝と為すなり。此の意を知らざる天台の末学は、止観の観妙は法華に勝るるという大僻見を起して悉く謗法と成る間、立正観抄に堅くこれを破す。その意を以て此くの如く申すなり。(19)」

と示している。隆師は中古天台思想の教判としての四重興廃を批判して、そのような考え方は謗法であると排したのであるが、原意としての四重興廃そのものの考え方に対しては全く否定して排斥したのではない。『私新抄』の中に「法華宗の意は四重興廃を用いるや」という項目をたてて、そこでは四重興廃は天台宗では理観だけの立場であるが、当宗には教観の二意があり、しかもその教観の二意は表裏一体・教観一双の関係であるとし、正行としては四重興廃は用いないが、助行としては用いることもあるとしている。今、その項目を引用してみると、

「尋テ云ク。当宗意用二四重興廃一耶。仰云。此宗ノ意モ教観二重有レ之。但如二天台宗一無レ之。彼ノ宗ハ理観ヲ面ト為ス四重興廃是ナリ。―（中略）―。当宗ノ意ハ以レ教面ト為シ以レ行裏ト為ス。其ノ故ハ時既ニ五濁悪世末法濁乱ノ砌ナリ。是レ散心麁道ノ凡夫ニシテ増不善根ノ輩四海ニ充チ国土ニ満テリ。何ゾ理観修行ニ堪ヘン耶。―（中略）―。当時ノ位既ニ愚者悪人ナリ。但聞二妙法ノ名題一取レ信ヲ計リナリ。何ゾ捨二本迹ノ教釈一取二観心一耶。―（中略）―末法ノ愚人不レ堪二観心一ト云事文義分明ナル者ナリ。此ノ方ハ一分四重興廃ヲ不レ用ヒ可レ云歟云云。雖レ然当宗ノ意諸御抄

趣、裏ニ智者ノ解行ヲ兼ネ助道助縁ニ理観ノ智ヲ可レ用者ナリ。―（中略）―。若爾ハ当宗ノ意智者ノ解行ヲ兼用シテ本迹ノ教門ヲ捨テ観心ヲ取ル義何無レ之耶。雖レ然当世禅宗天台宗等ノ得意ノ如ニハ不レ可レ有。教ニ即シテ理ヲ尋ネ、信ニ即シテ解ヲ求メ、本門ニ即シテ観心ヲ行ジ、本門寿量ノ題目ノ当体ニ三千三観ヲ用ヒタル者ナリ。同ジ題目ナレドモ、久遠本地総持ノ妙法、三世衆生ノ下種ト信知シテ唱ルハ本門ヲ不レ亡意ナリ。此時ハ四重興廃ノ中ニ爾前迹門ヲ廃シテ本門ヲ不レ廃。本門事行三千題目為ニ肝心ト不レ用ニ観心ヲ一ナリ。サテ本地久遠ノ釈尊本因妙名字即ノ時ノ口唱ノ南無妙法蓮華経ヲ我等ガ身上ノ所作ナリト信ズレバ、本門ヲ廃シテ観心ヲ用ヒテ四重興廃用フレ之ヲ可レ云ナリ。可レ秘レ之可秘之。(20)」

と示しており、助行として四重興廃を用いることもあるとしている。これは四重興廃を中古天台思想の考え方、即ち理観正意の立場からだけだと容認できないとしながらも、四重興廃の原典である『法華玄義』の立場にたったときは、題目の五字を信行する修行に正行助行の区別をすることで、用いることもあるとするのである。しかし、用いるとしてもあくまで助行助縁としてであり、それは傍意であって正意としては用いるべきものではないとしている。その理由は、末法濁世の下根の衆生には観心の修行は堪えることのできない不適当なものであるからというのである。題目について、これを信知し口唱することが正行であり、口唱すべきであると信解するのは助行とするのである。そして正行では四重興廃は用いないとする。

このように、隆師は四重興廃に対して中古天台思想の考え方とは異なる理解を示し、原典の『法華玄義』に即して考えるべきだとするのであるが、結論としてはやはり四重興廃判は正意として用いるべきではないとしている。

次に、中古天台思想の四重興廃の本門と隆師の主張する本門について比較してみる。まず前者は四重興廃によって規定される概念である以上、順次相対され止揚されて終極は「観心」の絶対的一元論へと導かれる過程の過渡的位置

を示す概念、換言すれば絶対的一元論としての観心という最高概念を導出するための前段階の概念であるといえる。即ち本門は観心によって否定捨棄される位置にある概念である。この本門を否定止揚し、教相としての法華経をも捨棄して超越した観心の概念が本門の上位概念・絶対的概念として設定される。絶対的概念としての観心は前段階の本門の概念と相対しての絶対という意味ではなく、本門観心の相対的関係を否定超越した絶対的絶対とでもいうべき絶対の意味であって、それ故絶対的一元論と規定できるのである。

これに対して後者、隆師の本門は四重興廃による中古天台思想のそれではなく、法華経の絶対性超越性を本門という用語で表現する立場なのである。『法華宗本門弘経抄』の冒頭に「一代諸経の中に法華経の本門を以て第一の経王となす事」と項目をたてて、

「法華宗の義に云く。教部権実本迹を以て一代の教相を判ずる。[21]」

と示し、隆師の要請する教判は「教部権実本迹」判であるとし、その中の本迹判をもって根本の教判であると定義し、続けて

「惣じては三世十方微塵の諸経の中には本門上行付属の妙法蓮華経計り第一なり。薬王の十喩法師の三説是れなり。此の本門上行付属の妙法蓮華経は教弥実位弥下の易行一切衆生最初下種無上の大法なり。故に本門を以て第一と為すなり。[22]」

と示して、本迹判によって顕わされた本門こそが釈迦一代の経々だけでなく、久遠劫よりの三世十方微塵の諸経の中でも最第一の最高概念であり、それは本門上行付属の妙法蓮華経であるとする。同様なことは『私新抄』にも

「本門ハ自レ元万法諸経ノ根本、一切衆生下種ノ本地ナレバ本迹二門倶ニ五味主、一切経ノ根本一乗ナレバ、法華経ハ五味主ト云フハ本門ノ意ナリ等ト蓮師ハ被レ仰者ナリ。[23]」

と示して、本門を最高の概念としている。隆師が中古天台思想の観心至上主義を批判否定し、自ら主張した法華経至上の教相主義の立場からして、本門は教相における最高概念として定義されるのである。そこには本門を教判規準・思想基準の根本原理とした隆師の本門観を見ることができる。中古天台思想の四重興廃における段階的教判の上の本門、二者択一の論理によって取捨されるような相対的概念のそれではなく、教相主義を表現する最高概念としての本門を示すのである。それ故、教判としての四重興廃の本門とは定義の方法が異なり、前述の二者択一の論理は隆師の本門には適用されていないといえる。

そこで、教相としての最高概念である本門といわゆる観心との関係であるが、隆師は教と観は一如であり一致であり一双であるとし相対比較すべきものではないとする。そのことを『弘経抄』『法華天台両宗勝劣抄』に

「尋ねて云く。天台宗に云ふが如く日蓮宗の意は観妙を以て本妙を廃すと云って本妙より観妙勝るると云ふべきや。答。観妙を以て本妙を廃すと云ふは在世滅後正宗流通教観の異なり。法体に二あり。本妙より観妙勝るると云ふには非るなり。滅後流通の観妙に望むれば在世正宗の教は脱益・聖者の人の他宝なる故に滅後下位の衆生の所用に立たず。故に本妙を廃して而も我等の為に時機に当て所用に立つる滅後流通の観妙を取るべしと云ふ事なり。立正観抄に委悉なり。此の旨を知らざる天台の末学管見を以て玄の二・四重興廃を見て法華の本妙より止観勝るるといふは大僻見なり。日蓮宗の意は爾前迹門は教のみ有って観なし。本門には教即観にして教観一致なる故に本妙即観妙なり。故に本妙を廃して観妙を取る可からざるなり。(24)」

「本門無教・教即観心事。私に云く。教に三重あり。爾前は過去の下種を明かさざるが故に一向脱益の教なり。今経迹門は過去大通王子の下種は迹門の観心なり。今日寂場已来の熟脱は滅後の為には他宝の教なり。なほ大通下種の観心も本門下種の観妙に望めては教と成るなり。謂く本起って後種子の父を払へば自然に熟となる故なり。本門

は一向に教なし。唯観心のみなり。―（中略）―。顕本する仏意は滅後末法の名字信行総持の観心に有る故に本門は教なし。一向滅後末法名字下種総名の観心なり。観心抄に本門は一向滅後を以て正機と為すと定判し給ふは此の意なり。[25]」

「教を判ずる日は迹本双照し、教を以て己心に入るるときは二ある迹本を一絶ならしめて行者を不二の実理に落居せしむるなり。故に教の迹本は所観の境となり観心は能観の智となるなり。此の意を知らざる天台の末学は玄文所釈の迹本の教相を見て、迹本は已分下劣の法なりと思い、止観観心釈の事相の諸教を己心に入れ迹本倶絶するをば、迹本の法体より観心の法体勝れたりと思ひて、止観法華の教観を取り放して勝劣を論じ大謗法を起すなり。[26]」

等と述べている。いずれも教相と観心は能所や修行の時期の差異にして、教観を相対すべきでなく、両者は一致であり、一如であるとしている。つまり、隆師においては宗教的価値基準の一つである修行実践を考慮した概念として示されるべきであり、その思想的理論は絶対の上の相対という論理に立って表現され、教相で示された絶対概念の本門がどう具体的に実践されるかという意味で、教相と観心の関係を論じているのである。隆師の本門は絶対的一元論としての概念であるが、あくまでも教相における概念であるから、観心を宗教的実践の価値として絶対の上の相対の論理で表現し、教観一如・教観一致して宗教としての価値、理論と実践との統一がなされる。それに対して、中古天台本覚思想の観心は同じ絶対的一元論の概念であるが、そこには現実の事象も全く肯定してしまうことから、修行実践の面は忘却無視されることになる。そこに教相を捨棄否定した観心至上主義の欠点があるといえる。

以上、隆師の本門観ともいうべき教相至上の考え方をみてきたのであるが、隆師においては本門は中古天台の四重興廃のいう本門とは全く別に定義された概念であり、更に観心についても同様である。両者の相違は教相と観心との関係における定義の相違によることで明らかとされるのである。そして、隆師の教学は法華経・それも本門の法華経

を至上とする教相主義であり、本門はそれを基礎づける根本原理としての最高概念として考えられるのである。

四　結

終りに、「四重興廃」に関して、中古天台思想の教判となった二者択一の論理からみると、行学院日朝師も、日隆聖人も権実判（爾前と迹門・即ち法華経と他の諸経）に関しては適用されるけれども、それ以外には適用されていないといえる。それは日朝師が本迹一致の立場からして、また日隆聖人は本門第一の教相至上の立場からして、教と観の二者相対、両者の取捨勝劣は考えないことによるといえる。いずれにしても、中古天台思想の観心至上主義は影響大なる思想であるが、日蓮教学にとっては妙法五字の唱題という実践行を無視できず、妙法五字と中古天台の観心との関連において中古天台思想の表現をどう受容するかに、天台教学研鑽の努力がなされたといえる。そして日朝師は題目を観心とし、日隆聖人は滅後末法名字信行の総名を観心とするのである。前者は本迹一致の立場の題目であるのに対して、後者は本門の法華経による本門上行付属の題目ということになる。それ故、両者とも教と観は一致としたのであるが、それぞれの教と観の内容・意味づけに相違があり、形式的にみれば同じ一致のようであっても、両者は全く異なって定義された概念として理解されなければならないのである。法華経（方便品と寿量品）の読誦が本迹であって教相であり、題目を唱えることが観心であると配する日朝師の教観一致と、本門の法華経という教相を最高概念とし、その教相に即しての題目を唱えるという実践行が観心であるとしての教観一如の日隆聖人の立場は似て異なるものといえる。それでも日蓮教学と中古天台思想とを比較対照したときには、両者はそれぞれに日蓮教学の独自性・主体性を希求したのであることは充分に伺い知ることはできるのである。日朝師と日隆聖人との更なる比較検討は今後の課題としたい。

註

(1) 『大正新修大蔵経』（三十三巻）六九七頁
(2) 伝忠尋とされる『漢光類聚』『法華略義見聞』等にその表現がある。
(3) 『一帖抄』（『天台宗全書』第九巻）三二頁
(4) 『日蓮辞典』『日蓮宗事典』等の「五重相対」の解説の中にみられる。
(5) 『日蓮宗学説史』（望月歓厚博士）一一五頁以降、『日蓮宗教学史』（執行海秀博士）八四頁以降
(6) 『日蓮宗宗学全書』（十六巻）三七六頁
(7) 立正大学蔵写本
(8) 『法華草案抄』（八巻）十七丁ノウ
(9) 「日蓮教学における寿量本仏観の展開」（北川前肇氏論文、『日蓮とその教団』（第二集）所載）
(10) 『日蓮宗宗学全書』（十六巻『観心本尊抄私記』）二〇三頁
(11) 『同書』　二〇三頁
(12) 『同書』　二〇五頁
(13) 『同書』　二四二頁
(14) 『同書』　三六一頁
(15) 『御本尊十界口伝』（『本尊論資料一五四頁）
(16) 『当家朝口伝』（下巻、「毎日勤行事」）立正大学図書館蔵写本
(17) 『法華略義見聞』（『大日本仏教全書』16）三九頁〇
(18) 『日蓮宗宗学全書』（八巻）五一頁
(19) 『法華宗本門弘経抄』（一巻）六六五～七頁
(20) 『日蓮宗宗学全書』（八巻）五三頁
(21) 『法華宗本門弘経抄』（一巻）一頁
(22) 『同書』　二頁
(23) 『日蓮宗宗学全書』（八巻）二七八頁
(24) 『法華宗本門弘経抄』（一巻）二〇六～七頁
(25) 『同書』　五〇三～四頁
(26) 『法華天台両宗勝劣抄』　一四四頁